

---

# クリスマスなんて大嫌い！

滝沢美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスなんて大嫌い！

### 【Nコード】

N4156P

### 【作者名】

滝沢美月

### 【あらすじ】

クリスマスが大嫌いな女の子、千葉花音。クリスマス1週間前、友達に無理やり合コンに連れられて行くと、そこには大嫌いなアイツがいて……

## 第1話 合コンでアイツに再会

クリスマスなんて、大嫌いっ！

日本人はどうしてこう、イベント好きなのかしら。

キリスト教でもなければ、たいして神様も信仰してないのに、十月のハロウィンが終わると十一月には早々とクリスマスカラーで街中が彩られる。

店内のBGMにはクリスマスソング。いたるところでクリスマスツリーやクリスマスオーナメントが飾られ、店頭にはクリスマスに関連した商品が並べられる。プレゼントのラッピングだって、クリスマスカラー。

日本人なら誰でも好きそうなクリスマスだけど……私は、大っ嫌いだ。

それなのに、どうして私はこんなところにいるのだろう。

クリスマス目の十二月十九日、日曜日。

流行りのクリスマスソングが流れる大型ショッピングモールのメインゲートに立つ私の横には、親友の順子さんと悠ちゃん、それから男の子が三人。

この時期は、ショッピングモールに来るのも嫌なのに、順子さんがどうしても欲しい物があるから買い物に付き合ってくれって、そう言われて引っ張られて来たんだけど……これって、合コンよね？

「彼が、私の友達の山口健君」

背が小さく、少し染めた茶髪のウェーブヘア、くりっとした瞳が

印象的な順子さんが男の子のうちの一人を紹介する。

「山口です、こっちにいるのが、石川と香川」

紹介された山口君は、さらに横にいる男の子を紹介してくれるのだけど、それまで上の空だった私は、山口君の横に立った男の子をちらっと見て、その瞬間、ドキッとする。向こうも私に気づいたように、指をさして叫んだ。

「……………千葉花音？」

そう叫ばれて、私はぎゅっと眉根を寄せて、そう言った男の子を睨んだ。

「香川理桜……………どうしてあなたがいるの？」

## 第2話 理解不能な行動

香川理桜<sup>かがわしお</sup>。彼とは、中学校が同じで、偶然にも三年間同じクラスだった。背は百六十八？と男の子の中ではそんなに高くない方だけど、きりつとした目元、鼻筋の整った中性的な顔が上級性・同級生の女の子から人気があつて、運動神経も良く活発で、男の子のリーダー的存在でもあつた。

私は……というところ、身長は百五十七cmと平凡、顔も成績も平凡で、その上性格は人見知り・内気ときて、クラスの人気者の彼とはほとんど接点がなかったのだけだ。

席替えで初めて席が隣になった時、教科書を忘れたと言つた彼は、私の許可も取らずに教科書を勝手に使いはじめた。その強引な態度に私は頭にきてしまつて、普段は思っていることの半分も言えない私が喧嘩をしたの。それ以来、私と香川理桜は犬猿の仲なのだ。

その喧嘩の後も、ことあるごとに香川は私に絡んできて、ノートを勝手に写したり、お気に入りのお気に入りのペンを取られたり。そのたびに、私は言い返したいけど結局言い返せなくて、卒業まで香川のいやがらせが続いた。

他の人にはそんないじわるをしてる様子はなく、なぜ私にだけ絡んでくるのか、なぜ嫌われてるのは分からなかつたけど、私も香川のことには嫌いだつたし、関わるよりはいいと思つて我慢した。

卒業後は会うこともなく、今まで存在すらも忘れていたのだけだ……二年ぶりに目の前に現れた香川は少し背が伸びて格好良くなったように感じたけど、中学の嫌な思い出がよみがえつて、嫌悪感が胸の中を渦巻いた。

クリスマスの次に嫌いな、香川が目の前にいる……そんなことを考えてると。

「花音<sup>かのん</sup>、知り合いなの？」

そう、順子さんに聞かれる。

「中学が同じだったの」

ただそれだけよ、そう心の中でつけたして答える。

「えっ？ 偶然だね」

そう言った順子さんの目はつきつきしている。私はうんざりした顔で順子さんを見た。その無言の威圧に、ちよっとたじろいた順子さんだったけど。

「じゃ、じゃあ、まずはカラオケ行こうか」

そう言って、ショッピングモールにあるカラオケ屋に向かった。

「ねえ、買い物って言ってなかった？ なんでカラオケなの？ っ  
ていうか、それはいいとしても、これって合コンよね？」

女子トイレの中。鏡の前に立った順子さんを、腰に手をあてて問い詰める私。

「まあまあ、花音のためを思って順子さんがセッティングしてくれたんだからさ、いいじゃん、楽しめば」

そう言っただけで私と順子さんの間に割って入る、悠ちゃん。

「よくない！」

私はそう叫んで、胸の前で腕を組んでぶいっつと後ろを向いた。

「花音、そう怒らないでよ。騙したのは謝るけど、クリスマスを目前に彼氏がないなんてつまらないでしょ？」

「別に……、クリスマスなんて嫌いだし、男の子も大っ嫌い！」

私の嫌いなものランキング。クリスマス、香川理桜、男の子。あがり症で男の子とまともに話すことができないという理由もあるけれど、中学時代、香川にいじわるされてからは男の子自体が嫌いというか苦手になってしまった。

「彼氏が欲しいのは順子さんでしょ、この時期の合コンなんてクリスマス限定の彼氏探しなのはばればれ……」

「いいじゃない！ 花音が男嫌いなのは知ってるけど、十七歳のクリスマスを一人で過ごすなんてもったいないよー」

そう言った順子さんが私の肩を掴んで前後に揺らす。私は、その言葉に耳がピクピクつと反応して反論しようとしたのだけど。それを遮って、悠ちゃん。

「まあまあ、男の子たち待たせてるんだから、とにかく戻る！ 愚

痴はあとでいっぱい聞いてあげるから」

男の子なんて、いくらでも待たせとけばいいのに。そう思ったけど、悠ちゃんにほんぽんつと頭をなでられて、私はしびしびカラオケルームへ向かう二人についてトイレを出た。

「では、改めて自己紹介します！ 宮城 順子です」

「長野 悠です」

「……千葉 花音です」

小さな声で言っつて、俯いた。合コンには何度か、順子さんに無理やり連れて行かれたことがあつたけど、やっぱり慣れないな。恥ずかしくつて、顔が上げられない。

「あつと、花音は人見知りで徐々に話せるようになると思うから、よろしくね」

そう悠ちゃんがフォローしてくれる。じいんとして、悠ちゃんを見上げる。悠ちゃんは、長身で手足に形よく筋肉のついたスポーツ少女。さらつとした黒髪を頭の上で一本にまとめた姿はとても魅力的だ。

「花音ちゃんつて名前かわいいね」



「香川と同級生だったってほんと？」

交互に山口君と石川君が私に話しかけてきた。注目が自分に向けられてることにビックリして、縮こまる。

「えつと……」

私が口を開いた時。

「なんか曲入れていい？」

足を開いてドカツと椅子に座った香川が、そう言っただけで会話を遮った。みんなの視線の先が私から香川へと変わる。香川は、返事を待たずにリモコンを操作して機械に向かって送信した。さっきまで新曲の案内が流れてた画面がぱつと変わり、室内が暗くなり色とりどりのライトが光って曲が流れて始め、香川がマイクを取って歌いだした。

「ねっ、香川君ってカッコイイね！ 歌も上手いし、さっきもさりげなく花音の事助けてくれて優しそうだし、イイかも」

順子さんが耳元でささやく。かつこいい？ 優しい？ 私がいたいてる香川のイメージとは全く一致しない言葉に、自分の耳を疑い、まじまじと順子さんを見つめる。それになんて言ってた？ 助けてくれた……だつて？

「えっ、なに？ 助けたつて？」

「花音が注目的になって困ってるのを、話そらしてくれたでしょ

「？」

そう言って、順子さんが片眼をつむってウインクする。

「…………えっ、そうかな？」

私は腑に落ちない気持ちでつぶやいた。ただ単に、歌いたかっただけじゃないの？ 香川の強引な性格は相変わらずなんだ、って私は感じたんだけど？

香川が歌ったことで、みんなも曲を入れて次々と歌う。私はとりあえず、誰も見ていない歌本を膝の上に乗っけてパラパラとめくった。

実は…………カラオケもあんまり好きじゃない。こんなこと言ったら、嫌いなもの多すぎて言われるかもしれないけれど、人前で喋るのも恥ずかしいのに、歌うだなんて考えられない。それに音痴だし。そりゃあ、カラオケに行かないわけじゃないよ。仲のいい女友達だけでは時々行くし、歌いもする。でも、今日はさすがに歌うのは無理よ…………

そう考えて、どの曲にしようか選んでるそぶりでも、歌本を見ていた。

すると、いつの間にか山口君が隣に移動してきて、歌本を覗いてきた。

「花音ちゃんは、いつもなに歌うの？」

あまりに近くで話しかけられて、私はびっくりして山口君をまじまじと見てしまった。

山口君は、さらっとした髪を短く整えて、眼鏡をかけた顔は平凡

だけど、全身から漂う柔らかい雰囲気が万人受けしそうな好印象を与えていた。そして、すらっとして見えるけど、脱いたら筋肉がすごそうだなと思った。いまはやりの細マッチョね。

そんなことを考えて、山口君を隅から隅まで無言で観察してたら、山口君と目があつた。話しかけられたのに、じろじろ見て何も言わない私ってカンジ悪いだろうに、山口君は全く気にした様子もなく白い歯を見せてにこっと笑った。

「花音ちゃんって、ほんとに恥ずかしがり屋なんだね」

優しい笑顔でそう言われて、かぁーっと顔が赤くなるのが自分でもわかつた。恥ずかしくて、両手で頬を押さえて下を向いた。

「えっと、ごめんなさい、慣れなくて……」

そう言った時。

ドサッ！

山口君とは反対の、私の隣側に香川が音を立てて座つたの！

さっきまで、私の横に座つた順子さんが椅子の端に追いやられて呆然と香川を見ていた。

「なっ、なに!？」

私は思わず叫んでいた。

歌っていた悠ちゃんも、石川君も山口君も順子さんも私を見たけど、香川だけがまっすぐ前を見ててこっちを向こうとはしなかった。私は、ぎゅっと眉根を寄せてもう一度言った。

「なに?」

なんで、いきなり隣になんか座るのよ！ 近いし！ ってか私に近づくな！

ガルルルル……

犬だったらそう唸っていそうな勢いで、香川を睨みつけた。香川はそんな私の睨みも無視して、机の上の飲み物を取ってジュルルーっと飲み干すと、空のコップを持って立ち上がり、部屋の外に出て行った。

流れてた曲が終わり予約曲もなくて、部屋の中が静まり返る。残された五人はお互いの顔を見合わせて、首をかしげる。

「なんだっただ？」

そう言った山口君。

「香川が自分から女の子の隣に座るなんてめずらしいな……」

石川君。

端っこにいた順子さんが間を詰めて私のすぐ横に座りなおして言った。

「花音も大きな声出すなんてめずらしいね」

そう言われて、胸がざわざわした。

私は、手元の歌本からリモコンに視線を移した。

「それ、歌うの？」

山口君が聞いてきた。

「うん」

私はこくと頷いて、リモコンを操作した。さっきの出来事から胸がざわついて、なんだか歌いたい気分になったのだ。無難に歌える曲を選んで、送信する。

「いいよね、この曲。俺も好きだよ」

そう言って笑った山口君の笑顔がとても素敵で。

「うん、私も好き」

いつのまにか山口君と普通に話せて、山口君につられて笑っていた。

### 第3話 胸が痛む時はいつだって・・・

カラオケ店を出て、山口君と並んで歩く。男の子が苦手だった私だけど、すっかり山口君とは打ち解けて、女友達と接するみたいにか話せていた。

「山口君は順子さんと同じ中学だったんだよね？　じゃあ、家はここのあたりなの？」

「そう、最寄駅は谷津だから」

「うちは海神だよ」

「けっこう近くだね」

言って山口君がにこっと笑う。山口君は親しみやすく、今まで男の子とまともに話せなかったなんて嘘のように、とても楽しかった。

男の子たちと別れてカラオケの帰り、そのことを順子さんに話したら「それは恋だよ」って。いくらなんでもそれはないでしょ。ふうーっとため息をかく。

確かに男の子なんて……って思ってた私が、男の子と普通に話せて、しかも楽しいって思うなんて珍しいことだけど、イコール恋、って言い切るのは極端すぎるよな。

「恋は突然やってくるものなのよー、気付いたらドキドキしたり、胸が痛んだり……」

順子さんの言葉に、ん？ と聞き返す。

「胸が痛む……？」

いつかどこかで、そんな経験をしたような気がして、過去の記憶をたどるが思い出せず、胸がもやもやする。

「そう、胸が痛むの。でも楽しいんだよね、恋って」

そう言っつて、一人キヤーキヤー飛び跳ねそうな勢いで騒ぐ順子さん。

「まあ、恋かどうかは置いて、花音が男の子と仲良くするのはいいことじゃない？」

悠ちゃんが言っつて、私の肩をぽんつと叩く。私は悠ちゃんを見上げて、首をかしげた。

家に帰ってきて、ベットに座って、はぁーとため息をつく。

今日は、いろんなことがあったな。無理やり合コンに連れていかれて、二年ぶりに香川に会って、男の子と話して。

そこまで考えて、また胸にもやもやしたものが込み上げてくる。きっと香川に再会したからだ。あいかわらず強引で意味不明な行動ばかりで嫌なやつだったな、そう思った。その時。

ピロ、ピロ、ピロ。

携帯がメールの着信を知らせたので開くと、知らないアドレス。

『こんばんは、今日会った山口です。宮城からアドレスを聞いてメールしました。今日は楽しかった！よかったら、また遊ぼう』

山口君からのメールでびっくりする。順子さんから聞いた？どうして？頭の中は疑問だらけだったけど、とれあえず返信をしようとして携帯を見つめる。

『こんばんは。私も楽しかったです。また皆で遊びましょう』

そう打ったところで、眉根をぎゅっと寄せる。ピッ、ピッ、ピッ……と勢いよくボタンをいじって、ボタンと携帯を閉じた。

次の日。

「昨日、山口からメールあった？なんてきた？」

そう言う順子さんの目が好奇心で輝いている。私は順子さんに詰め寄って。

「順子さん！なんで？なんで、山口君にアドレス教えてるの？山口君に聞かれたの？」

私はそう叫んだ。

「あー、私から山口に教えただよ」



頭をぱりぱり搔きながら言う順子さん。

「だって、花音が山口に興味持ったみたいだったから。山口にそう言って教えたの」

「はいっ!?!」

私は順子さんに掴みかからんばかりに近づいて、聞き返した。

「順子さんから、アドレス教えたの!?!」

「うん。まずかった?」

順子さんはそう言って首をかしげる。私はさっきまでの勢いをなくして、力なく椅子に座った。私が山口君に好意を持ってるって伝えて、アドレス教えたってこと? 少なくとも山口君はそう誤解してるってことよね……

私ははぁーっとため息をついて、机に顔をつけた。

部活の朝練を終えて教室に入って来た悠ちゃんが、どうしたの? と聞く。私は、悠ちゃんに抱きついて、今までのやりとりを話した。話を全部聞き終わると悠ちゃんは。

「ふーん。まあ、アドレスを勝手に教えた順子さんの行動はやりすぎだと思うけど。いいんじゃない? とりあえず、山口君とメールしてみれば」

「そんな……」

「私が見たカンジ、山口君っていい人そうだったし、花音もそう思

うんでしょ？ まあ、勘違いしてるのはちょっと問題だけど、メールしてきたってことは向こうもそれなりに気があるってことだし。いい機会だから、メールから仲良くして、つきあってもいいんじゃない？」

悠ちゃんはそんなことを言う。

昨日も思ったけど、悠ちゃんは私が男の子に対してもっと積極的になればいいって考えてるみたい。私は、しばらく考え込んでから

「うん……わかった」

そう言った。順子さんはそれを聞いて、安堵の息をつく。

「それで、昨日はなんて返信したの？」

興味津々に目を輝かせて聞いてくる。私はきつ、と順子さんを一睨み。アドレスを勝手に教えたことは、まだ怒ってるんだから！ ぶいっとそっぽを向いて答える。

「返信してない」

「えっ？」

私の言葉に、二人同時に聞き返す。私は二人の顔を見れないで……答える。

「だから、返信してないの。なんて返信したらいいかわからなくて……」

最後の方はだんだんと声が小さくなっていく。

昨日、悩みながら考えた返信は無難に『また皆で遊びましょう』  
だった。でも、皆って昨日の合コンのメンバー、つまり香川も一緒  
ってことよね!？」

そう考えたら、また胸がもやもやしてきて、気がついた時には返  
信用に打ったメールを消去してたの。

「とりあえず、自己紹介と、よろしくお願いします的なことを送っ  
たらどうかかな？」

そうアドバイスをくれた悠ちゃん。私は頷いて、携帯を取り出し  
た。

『千葉花音です。昨日は突然メールがきてビックリして、返信しな  
くてごめんなさい。昨日は私も楽しかったです。これからも仲良く  
してください。よろしく』

ピッ!

送信ボタンを押して、ボタンと携帯を閉じる。すると、一分も経  
たないうちに携帯が光ってメールの着信を知らせた。学校にいる間  
は、音もバイブも切ってマナーモードにしてるの。

『よかった。返信ないから嫌われたのかとちょっとびくびくしてた。  
こちらこそよろしく!』

開いてみると、山口君からの返信だった。あまりの早さに呆然と  
する私。

「山口から?」

好奇心丸出しで聞く順子さんに頷くと、悠ちゃんがくすくと笑っ

た。

始業のチャイムがなって、それぞれ自分の席に戻る。私は、携帯を一度見て、それから制服のポケットに閉まった。

お昼時間。

食堂でお弁当を食べながら順子さん。

「あーあ、この間の合コンはイマイチだったし……」

お弁当のおかずをフォークでぱくつと口に運びながらつぶやいた。

「あれ、香川君にメアド聞いたんじゃないの？」

私の横に座った悠ちゃんが聞く。

「えっ？」

私はその言葉にビクリして、ゴホゴホとむせる。口の中のご飯が飛び出しそうになってあわてて口に手を当て、モゴモゴと喋った。

「なっ、なに？ 順子さん、香川を好きなの!？」

「カッコいいし、ちょっといいかと思ってたの。でもダメ！ 彼女いるって言うてた」

私はその言葉に、ドキンとする。

「ってか、彼女いるなら合コン来るなってカンジよね！ あー、山口の人選ミスね。まったく、こんなことなら花音のメアドなんて教えるんじゃないかったわ。アイツ一人だけいい思いして許せない……」

おかずをぱくぱく口に放り込みながら、最後のほうは独り言のように文句を言う順子さん。順子さんが喋り続けるのを呆然と聞いて、私はその一瞬の胸の痛みの意味をあまり気にしなかった。

「まあまあ」

いつも中立の立場の悠ちゃんが、順子さんをなだめる。

「もうこうなったら、二十三日にかけるしかないわね！」

そう叫んで立ちあがってガッツポーズをする順子さん。周りにいた生徒がちらちらと順子さんを振り返るけど、順子さんはそんなのお構いなしで気合い満々。その気合いがすごすぎて、私は恐る恐る聞く。

「二十三日って……？」

「なにって、決まってるじゃない！ 二十三日も、もちろん合コンよー！」

そう言った順子さんに対して、私と悠ちゃんは顔を見合わせる。悠ちゃんは「どうにもならないね」と言って呆れ気味に首を振った。

第3話 胸が痛む時はいつだって・・・(後書き)

誤字などありましたら、お知らせください。> m ( ) ( ) m <

## 第4話 迷いと秘密

お弁当を食べ終えて教室に戻る時、自販機に寄るからと順子さんと悠ちゃんと別れて一人歩く。朝からポケットに突っ込んだままの携帯に気づき、取り出してメールを打つ。

『返信遅くてごめんね。嫌いとかそういうのじゃなくて、あまりすぐに返信できないので、気にしないでください。山口君はとっても話しやすく、嫌いになるとかないから』

ピッ、とメールを送信する。すると、またすぐに山口君からの返信が来た。

『そっか、了解！ そう言ってもらえると嬉しいな。俺も花音ちゃんと話すの楽しかったよ』

山口君って、すごくマメな性格なのかしら。とっても返信がはやくてビックリする。

それから、午後の授業が始まるまでメールのやり取りをして「二十三日一緒に映画に行かない？」と誘われたのだけど、どうしよう……

悠ちゃんに相談したら絶対に、いいと思うって言われそうだな。でも、このまま何も予定がなかったら、順子さんの合コンにまた引っ張られて行くことになりそうだし……それだけは避けたいな、っと思う。でも、映画もなあ……

そんなことを考えていてめずらしく上の空で授業を受けて、あっという間に放課後になってしまった。

帰ろうと思ひ教室の中で順子さんを探すと、順子さんはクラスメイトの岡山さんに話しかけていた。

「ねっ、どうだった?」

「大丈夫だって二十三日。向こうは五人っていうから、私と順ちゃん、あとはどうする? 私で声かけちゃっていい?」

岡山さんは、綺麗なロングウェーブヘアを背中に流し、ちょっと濃いめのお化粧をしてる。見た目は派手だけど、面倒見が良く、それから順子さんと同じ合コン好き。

きっと、二十三日の合コンのセッティングを岡山さんに頼んだのだろう。

「うーん、ちょっと待ってて、悠ー」

そう言って、順子さんが悠ちゃんを呼んだ。

「二十三日、合コン行く?」

当たり前だけど、悠ちゃんには正直に合コンって言って誘ってるのね。私はそんなことを考えた。

「ん、その日部活ないし、行ってもいいよ」

「了解! あとは……花音!」

ドキンっ。



急に呼ばれて、私は心臓が飛び出るくらい驚いた。ぼーっと順子さんたちの様子をながめてて、急に現実を引き戻された。

「あっ、なに？ 順子さん」

なんで呼ばれたかは分かってたけど、そうやって私は二人に近づいた。

「二十三日ひまだったらさ、合コン行かない？」

お昼の時に二十三日も合コン！ って宣言してただけに、誤魔化さずに言う順子さん。

「えっと……」

私はまだどうしたらいいか迷ってて、仕方なく相談してみることにした。

「実はさっき山口君からメールで二十三日に映画に行かないかって誘われて……」

そうやって私は悠ちゃんを仰ぎ見て聞いた。

「どうしたらいいかな？」

「花音はどうしたいの？」

悠ちゃんに問い返されて、私は困った。合コンを断るために行くのは気が進まないけど、でももし合コンの話がなかったらどうしてただろう……やっぱり、迷ってたかな、そう考えた時。

「迷ってるなら、行ってもいいんじゃない？ 行きたくないわけはないんでしょ？」

そう聞かれて、私はこくと頷いた。

誘われて嫌ではなかったよ、むしろ嬉しかったし。ただ、こんなこと初めてで、どうしたらいいのかわからなかったの。

「いいじゃん、映画デート！ これでクリスマスデートに一歩近づいたね。私も頑張らないと！」

そう言っただけで気合いを入れる順子さん。私は、複雑な気持ちで笑い返した。

「あーでも、今年はイブが終業式でラッキーよね！ 午後からはクリスマスデートできるわけだし」

「そうは言っても、順子さんはまず相手を見つけないとね」

そう言っただけで順子さんの肩をぽんと叩く悠ちゃん。その言葉に、笑顔がひきつって、悲しそうな顔になる順子さん。

「ほら、クリスマスはデートじゃなくても、家族でパーティとかするでしょ？」

励ますように言った私を、順子さんがちょっと冷めた目で見て。

「家でクリスマスなんてたいして祝わないし、ってか、この歳で家族と祝ってもねえ？」

そう言う順子さん。

「そーいえば、花音っ家<sup>ち</sup>ってクリスマスは家族でパーティするんだっけ？ 去年そう言ってたような」

「うっ、うん」

悠ちゃんの言葉に、ギクツとして、ぎこちなく相づちを打つ。自分からこの話題を振ることは避けてたのに、まさかこんなことになるなんて……

「パーティなんて大層なものじゃなくて、ケーキ食べるだけだよ。

……そっか、普通は家でクリスマスって祝わないんだね……」

その私の言葉に、疑問を浮かべて顔を見合わせる順子さんと悠ちゃん。私は、これ以上追及されない様に、話をもとに戻す。

「あつ、とりあえず、映画行ってみようかな。だから、二十三日の合コンは行けないや、ごめんね順子さん。わっ私、今日は先に帰る！」

そう言っつて、自分の席の上に置いてあった鞆を取っつてあわてて教室を飛び出した。

「花音　??？」

飛び出した私の後ろで、順子さんが呼んでたけど、私はひたすら走っつて家に帰った。



## 第4話 迷いと秘密（後書き）

誤字などありましたら、お知らせください> m ( m <

『クリスマスなんて大嫌い!』は、あと三話・・・折り返し地点です!

## 第5話 思い浮かべた顔は・・・

家に着いて、着替える時にスカートのポケットから携帯を取り出す。見ると順子さんと悠ちゃんからメールがきてた。

『花音、大丈夫？　なんか様子が変わったから気になって……。なんでもないならいいけど！　二十三日は私も合コン頑張るから、花音も映画デート頑張って！　なんだかんだ言ったけど、山口ほんといいやつだからさ、花音にはおススメだよ』

『二十三日のこと、よく考えてみてね。迷ってるならまた相談に乗るし。元気出せ！』

メールを読んで、胸がじーンとする。なんていい友達なんだろうって。

どうしてもこの時期　大嫌いなクリスマスに周りが浮かれてる時期　は、イライラして情緒不安定になってしまふ。私がクリスマスを嫌いな理由を聞いたら、きつと皆は「そんなこと？」って言うかもしれないけど、私にとっては大問題なのだ……  
早く、クリスマスが過ぎるといいな……

極力、通学以外は外に出ずクリスマスモードの場所には近づかないで三日間を過ごした。そして、十二月二十三日。

八幡駅の改札前で、山口君を待つ。駅に併設したスーパーからクリスマスソングが聞こえてきて、私は知らず眉間に皺を寄せた。スーパーの前では特設のケーキ屋ができてサンタの格好をした店員がクリスマスケーキを売っている。

クリスマススムードの場所には近づかない様になっていた努力もむなしく、クリスマス一色の場所に来てしまったことを少し後悔する。今日からの3日間、クリスマススムードが一気に最高潮になることをすっかり忘れてて、出かけたことを後悔した。ふうーっとため息をついた時に、改札を抜けて山口君が来た。

「花音ちゃん。ごめん、待った？」

そう言った山口君が、私の険しい顔を見てふっと表情が止まる。

「俺、無理やり誘っちゃったかな？」

「えっ？」

私は一瞬、心の中を見透かされたのかとビクビクして、山口君を振り仰いだ。

「映画とか、あんまり興味ない？」

そう聞かれて、私の険しい顔の理由ワケを映画が嫌だからと勘違いされたと気づく。

「違うよ、ちょっとビクビクして……」

「びくくり？」

山口君が、首をかしげて聞き返す。

「すごい街中がクリスマスって雰囲気で……圧倒されちゃって」

そう言った私に、山口君がにこっと笑って。

「そうだね、どこいってもクリスマスソング流れてるしね、行くところか」

私の言葉を特に気にした様子もなく、そう言って歩き出した。

映画は、何年も前に流行ったアニメを実写化したもので、心のどこかでクリスマスに関連した映画じゃなくてほっとしてた。

映画を観終わって、ファーストフードに入る。

「映画面白かった？」

「うん、原作は見たことなかったけど面白かったよ、感動した」

山口君と見た映画について話していると、ふいに山口君が顔を上げてお店の入り口の方を見た。

「山口」

その声にドキンとして振り返ると、そこには、香川理桜と女の子がトレーを持って立っていた。

「おっ」



そう言っつて片手を挙げる山口君。

「こんにちは、理桜の友達の山口君だよね」

「えつと、君は……」

「A組の奈良<sup>な</sup>良<sup>ら</sup> 佳世子<sup>かよこ</sup>です」

香川の隣にいた女の子がこちらを見てぺこつと頭をさげる。私もつられて頭をさげる。

「席、空いてないみたいだから、一緒にいいか？」

香川が言っつと山口君が頷いて、奈良さんも笑顔で頷く。

私は内心、えっ？ と思っただけど、十二時を過ぎて店内が混み始めていたので、席を詰めて隣に奈良さんを迎えた。彼女はにこつとかわいらしい笑顔を見せる。順子さんが言っつた彼女っつて、きつと奈良さんのことよね、休みの日に一緒にいるくらいなもの。そう考えた時、胸にツキンと小さな痛みが走っただけど、その理由がなんなのかやっぱり分からなかった。

「山口君の彼女？」

奈良さんが聞く。

「友達の千葉花音ちゃん、今日は映画見てきたんだ」

山口君が爽やかな笑顔で言っつ。

「私たちはね、買い物してきたの」

「そうなんだ、なにか買った？」

私たちが話してる間、香川は一言も発せず、一人黙ってた。

「先週の日曜日が私の誕生日でね、その日は理桜が用事あったから今日一緒にプレゼント選んでくれるって言って、コレかわいいでしょ」

そう言って、鞆についたウサギのキーホルダーを見せてくれた奈良さん。私と山口君は顔を見合わせる。

先週の日曜って……私たちと合コンした日じゃない！ 彼女の誕生日より合コン優先ってどうなの？ ってか、彼女に黙って合コン行くなってどうなのよ！？ 私は心の中で憤慨した。

「そうなんだ……よかったね」

山口君も同じようなことを思ったのか、少し申し訳なさそうに言う。

その間も、やっぱり会話に加わろうとしない香川。

「あっ、ちょっとお手洗いに行つて来るね」

そう言って奈良さんが席を立つ。奈良さんがトイレに入るのを見届けてから。

「なんだよ、彼女の誕生日だったなら先に言ってくればよかったのに。ってか、いつの間に付き合いたんだよ？」

そう言う山口君。

「別に」

横を向いて座って、こっちを見ずに香川が言った。

うわっ、最低な男。心の中で香川をなじる。奈良さんも、こんな男のどこがいいのかしら。あんなにかわいいんだから、モテそうなのに。そう考えて、眉根をぎゅっと寄せて香川を見た。その瞬間。ばちんっ。

ちょうど顔を上げた香川と目があう。香川は無言で私をみつめ、それからふいつと視線をそらした。

ガン飛ばしてきたよ！なんて嫌なやつなの！ 口に出しては言えない感情が、私の胸の中をぐるぐると渦巻いた。

「あいかわらず、淡泊だな……」

そう言って苦笑いした山口君は、私に聞く。

「あつ、花音ちゃんは誕生日いつなの？」

「えっ？」

私は驚いて、香川から山口君に視線を移した。山口君が爽やかな笑顔を向けて聞いてくる。きっと他意はないんだろうけど、私は返答に困ってしまう。

「えっと……」

「山口知らないのか？ こいつの……」

香川がそう言った時、奈良さんがトイレから戻ってきて席に座っ

た。

「ん？ 何の話？」

そう言った奈良さんがちょっとだけ女神様に見えて、私はあわてて話題を変えた。

「うっん、なんでもないよ」

「そう？」

なんでもない　　は嘘っぱかったかな？　私、感じ悪かったかな？  
でも奈良さんは気にした様子はなく、笑顔で首をかしげて、山口君はちらつと香川を見た。香川はまた、窓の外を眺めてこっちを見ようとはしなかった。

しばらく四人　いや三人かな　で話してから、ファーストフードを出て香川と奈良さんと別れ、山口君と一緒に駅に向かった。

鉄道高架の下を歩きながら。

「今日はありがとう、楽しかったよ」

私はそう言った。始めは、こんな日に出かけたくないと思ったけど、楽しくてあっという間に一日が過ぎて、最近の憂鬱だった気持ちを忘れられて良かったと思った。

「こちらこそありがとう。また会えるかな？」

山口君が爽やかな笑顔で言う。私はそんな山口君を見て、順子さ

んの言葉を思い出した。

『恋は突然やってくるものなのよー、気付いたらドキドキしたり、胸が痛んだり』

そう言ってたけど……山口君といて楽しいけど、そういう感情にはならないことに気づく。

「明日、また会えるかな？」

その言葉に、私ははっとして、勢いで頷いてしまった。

終業式。講堂に向かいながら、順子さんがため息をついた。

「あーあー、明日から冬休みだって言うのに、つまらないわねえ」

私が首をかしげると、悠ちゃんが耳元で教えてくれた。どうやら、昨日の合コンでも彼氏はできなかったらしい。

「私の何がいけないのかしら……」

そうつぶやく順子さんに、私は心の中で答えた。順子さんは面白い、理想が高すぎるのよ、って。もちろん本人に言っても、そんなことないって言われるだけだからね。

「それより！ 花音は昨日どうだったの？ デートは上手く行った？」

「上手く行ったかどうかは分からないけど、楽しかったよ」

正直な気持ちを言う。

「今日も遊ぼって言われて……」

「くうー、いいなあ。その幸せ、私にも分けてほしいなあ」

私の言葉を遮って言い、順子さんががばつと私に抱きついてこちよこちよとくすぐり始めた。

「やつ、やだ、順子さんやめてよー」

そんなことをやりながら歩いているうちに講堂に着き、しばらくして終業式が始まった。

「もういつそ今日は、独り者同士ではあーっ」と騒ごうよー！」

終業式とホームルームが終わると、私の机の前に来て、ばんつと机をたたいて順子さんが言った。そのあまりの迫力に、私はうんと言っしかなかった。

「じゃ、この後は、プラントン行ってカラオケで決まりね！ 私、他の子にも声かけてくるから、花音は先に行つて。あっ、山口にもメールよろしくー！」

「えっ？」

カラオケ……？ 私はうんって言ったことをすぐに後悔したのだけど、順子さんは教室で何人かに声をかけた後、他のクラスに行っ  
てしまつて、もう嫌とは言えなくて、私の伸ばした手はむなしく空  
をかいて、順子さんを呼びとめることはできなかった。

「私もちよつと部活のミーティングがあるから先に行つてて」

悠ちゃんにもそう言われ、私はしぶしぶ一人帰り支度を整えプラ  
ンタンに向かった。向かう途中、山口君にメールをする。

『今日なんだけど、順子さんがみんなでカラオケ行こうつて言うん  
だけどいいかな？』

そんなメールに対して、すぐに返信が来る。

『了解！ じゃ、こつちも友達誘つて行くね。場所はプランタンで  
いいのかな？』

返信を見て、笑みがこぼれる。普通だったら嫌つて言われてもお  
かしくないのに、山口君つて優しいな、アイツとは大違い……

そこまで考えて、自分の考えに動揺する。

なに、アイツつて？ やだ、私、誰の事考えてるんだらう……  
胸がドキドキして、顔が赤くなる。自分が思い浮かべた顔に、イ  
ラつとしてぎゅつと眉間にしわを寄せる。

プラントンに着いて、通路に置かれたベンチに座る。外で待つのは寒いからと中に入っちゃったけどみんな分かるかな。念のためメールをしておこうと思い、携帯を取り出す。相変わらずマナーモードにしっぱなしで、メールが来てたことに気づく。

あっ、順子さんからだ。

『ごめん！ 補習の説明会があること忘れてた……。みんな集まったら先に行つてて』

あらら。順子さん、補習だったのね。くすつと笑って、携帯を閉じる。

プラントンの中では、やっぱりクリスマスソングが流れてたけど、その時になって気づく。今まであんなに毛嫌いしてたクリスマスにクリスマスソングだけど、なんだか今日は全く気にならない、変な気分だった。

それは今日が二十四日だからかも。クリスマスももう明日で終わるし。

そんなことを考えていたら。

「……………千葉花音？」

そう声をかけられて、私はぎゅつと眉根を寄せて、そう言った男の子を見た。



第5話 思い浮かべた顔は・・・(後書き)

誤字などありましたら、お知らせください。m ( ) m <

## 第6話 大嫌い！

「花音ちゃん？」

見ると、香川理桜と奈良さんが目の前を通り過ぎるところだった。

「また会ったね。今日は一人？」

笑顔で話しかけてくる奈良さん。そんな彼女と一緒に香川を見て、胸がざわざわした。

「えっと、山口君とか友達を待ってる？」

そう言った私に、冷たい目を向けて香川が言う。

「あんだ、こんなとこでなにやってるの？」

その香川の態度と口調にカチンっとする一方で、胸がチクリと痛んだ。

「だから、山口君や友達とクリスマスパーティーするから待ってるの！」

私は立ち上がって、叫びそうになった。

「はっ？ クリスマス？ だって、今日はあんだの……」

「花音ちゃん、お待たせ！」

香川が何か言いかけた時、山口君とその友達がやって来た。

「あつ、山口君」

私はほっと安堵の息をついて、山口君のもとに駆けよった。

香川はそんな私をずっと見てて、その視線から逃れたくて、私は山口君に隠れるようにした。

「山口、ちょっと」

香川は瞳に鋭い光を宿して、山口君を呼んでしばらく会話して、それから奈良さんを連れて去って行った。

首をかしげながら戻って来た山口君に聞いてみる。

「どうしたの？」

「いや、よくわからん。本当にクリスマスパーティーなのか？　なんで今日なんだ？　って聞かれたけど」

そう言っつて、また首をかしげる山口君と一緒に私も首をかしげる。香川はなんでそんなことを、わざわざ山口君に聞いたんだろう？　そっいえば、私にも同じようなこと言っつたなと直前の会話を思い出すけれど、理由はさっぱり分からなかった。

そうこうしてるうちに順子さんや悠ちゃんたちが合流して、みんなでカラオケ屋に向かった。

十数人と大勢だったけど、運よくパーティールームが空いててみんな

な一緒のカラオケルームに入った。

私は歌う気がなかったから入り口近くの席に座ると、山口君が隣に座った。

「花音ちゃん、今日はなにか歌うの？」

そう聞かれても上の空だった私に、山口君が下から顔を覗きこんできた。

突然、目の前に山口君のドアップが現れて、私はびっくりした。

「わっ!？」

そんな声を上げた私に、山口君はやさしい瞳の中に少しさみしさを宿して。

「気になる?」

「えっ?」

何のことを言われたのか分からなくて、私は首をかしげる。

「香川の事、気になる?」

そう言われて、胸がツキンツと痛んだことに気づく。

「えっ、なんで? 私には関係ないし……」

「そうかな? 俺には、香川の事気にしてるように見えるけど……。香川と花音ちゃんって中学の時、ほんとは仲良かったんじゃないの?」

「まさか……」

山口君の言葉にびっくりする。私と香川が仲良いなんて、ありえないし。

そう思つのに、さっきから尋常じゃない早さで鼓動をうってる。どきんっ、どきんっ、て心臓の音が周りに聞こえそうなほど。

「私は、香川のこと大嫌いだし……」

そう言った時、前にも感じたもやもやした気持ちがよみがえってくる。そうして、三年前のことを思い出す。いままで、ずっと忘れてたこと……

私は、ぼつんぼつんと話し始めた。

「……私、クリスマスが大嫌いなの」

山口君が驚いた顔をするけど、黙って私の話を聞く。

「昔は、ただクリスマスなんてなければいいって思ってただけなんだけど……」

三年前のクリスマスに香川が女の子に告白されてるところを見ちゃって。その時、私は心が荒れて胸が痛んだ。もしかしたら、香川を好きになりかけていたのかもしれない。でも、香川には嫌われてるし、自分もそれまで香川の事を嫌いだと思ってたから、自分の気持ちを素直に認めることができなかったの。

次の年、クリスマスムードになる街を見ては、クリスマスソングを聞いては、その時の事を思い出して胸がもやもやして、それを誤

魔化すようにクリスマスなんて大嫌い！　って思うことにしたんだ。

過去の記憶をたどって黙り込んだ私に、山口君が聞いた。

「どうしてクリスマス嫌いななの？」

私はくすつと笑って。

「それはね、私の……」

それまで一生懸命隠してきたことを話そうとしたんだけど、その時ガチャッ。

音を立てて、カラオケルームのドアが開いた。

それまでも、トイレに行ったりドリンクバーを取りに行ったり、いろんな人が部屋を出入りして特に気にはならなかったんだけど、私はドアから中に入って来た人物を見てびっくりした。

「なんで……？」

なんで香川がいるの？　そう言いたかったけど、言葉が続かなかった。呆然としてる私を見て、香川が眉根を寄せて不機嫌そうな顔をする。

「おまえこそ、なにやってんだよ？」

「クリスマスパーティー……」

いつもだった怒鳴り返していただろうけど、今はあまりにびっく

りしすぎて、普通に答えていた。

香川が眉をぴくっと動かして、睨んだ。

「はっ？　なんで、自分の誕生日祝わないで、クリスマスなんて祝ってんだよ!？」

その言葉に私はびっくりするけど。

隣に座ってた山口君も、側にいた順子さんと悠ちゃんもびっくりしてる。

「えっ、花音、今日誕生日だったの!？」

後ろの方で、順子さんの驚いてる声が聞こえる。

香川は、順子さんの方をちらっと見てはあーっとため息をついてから、私をじろっと睨んだ。

「なっ、なに？」

迂闊にも、その視線に恐怖さえ覚える。

つかっ、つかっ。

香川が私に歩み寄って手を振り上げたから、体をびくっと震わせて目をつぶった!!

ぶたれる!

そう思ったのだけど体に痛みは感じず、代わりに腕をぐいっと引っ張られ、自分の意志とは関係なくカラオケルームを出ていた。

カラオケ屋を出ても、香川は私の腕を引っ張ったまま、振り向く

こともなく歩き続けた。

香川が普通に歩いてても歩幅が違うから、私は体を前に引かれ走る形になり、転びそうだった。

「まつ、待って！」

私は息を切らしながら、どうにかそれだけ叫ぶ。

香川の力が強すぎて、掴んだ腕を振り払うことができない。でも、このままだと転んでしまう、そう思って叫んだ。

すると、ぴたつと香川が止まって、ドンツと勢い余って香川の背中にぶつかった。掴まれていた手が離されて、ぶつけて痛む鼻をさすった。

「どっして……」

それだけ言うのがやっとだった。その“どうして”には、いろんな疑問が詰まってる。どうしてここにいるの？ どうして誕生日の事知ってるの？ どうして連れ出したの……？

香川の背中をみつめて、答えを待った。

「はっ？」

なのに！

香川が放ったのは、そんな一言。

「はいっ？」

私は聞き返さずにはいられなかった。

「はっ？ ってなに？　なんで、こんなところに引っ張って来たのよ



「！」

叫ぶと同時に、私は香川の服を引っ張ってこちらを向かせようとしたのだけど。

寒さでくしゃみが出て、ぶるつと体を震わせる。急に引っ張られて来たから、コートも鞆もカラオケ屋に置きっぱなしだった。

「悪い……」

そう言っつて、香川が着ていたコートを脱いで私の肩にかけてくれた。それから、そつと私の手のひらをつかんで、プランタンの入り口に向かって歩き出した。

第6話 大嫌い！（後書き）

誤字などありましたら、お知らせください。> m ( ) ( m <

## 第7話 迷いの森の聖なるもみの木

さっきまでとは違って、やさしく握られた手のひらに熱を感じた。しばらく無言のまま香川に連れられて歩き、プランタンの中に入る。寒かった外から暖房の効いた室内に入って、耳がキーンとして身震いする。

私は半歩前を歩く香川を見て震える胸を、落ち着かせようとした。それから、さっき聞きそびれたことを、今ならちゃんと答えてくれるんじゃないかという気がして、私は勇気を振り絞って話しかけた。

「ねえ、どうして来たの？」

そう聞いたのだけど、香川は前を向いたまま答えない。

「ねえ！」

私がもう一度言うと、香川ががばつと勢いよく振り返った。

「お前、バカ？　なんで自分の誕生日祝わないでクリスマスなんて祝ってたんだよ？　どうして他のヤツに誕生日だって言わないんだよ？」

「なっ、ばかって何よ！？」

すごい剣幕で香川が言ってきたから、私も負けじと返した。

……って、待って？　違う、私が聞きたいのはそこじゃなかった。

「どうして、私の誕生日知ってるの!？」

そう、問題はそこよ！ 順子さんや悠ちゃんたちにも内緒にしてたことなのに、どうして香川が知ってるの？

「あっ？ そんなの中学の時に言ってたたる……」

そう言っただけで香川は視線をそらし、頭をかいた。

そうだったかな？ 確かに、中学の友達には私の誕生日を知ってるだろうけど、友達でもない香川が知ってて、しかもいまだに覚えてるなんておかしくない？

そう考えたら、ドキンっドキンっど鼓動が激しく打ちはじめた。

私はそれを誤魔化すようにぎゅっど眉根を寄せて香川を見上げると、ふいにこっちを向いた香川が私の顔を見て言う。

「おまえ、その顔やめろよな。不細工がもつと不細工になるだろ、だから彼氏もできないんだろ？」

「はっ？ 何それ？ 今関係ないし」

確かに、眉間にしわを寄せるのは私の癖だけど、そんなこと香川にどうこう言われたくないし！

「ってか、そーゆうあんたこそ、奈良さんはどうしたのよ？ 彼女、ほうっというていい訳!？」

「はっ？ なに他の女の話持ち出してるんだよっ」

「他の女って、彼女でしょ？」

香川の言ってることが意味不明で、私はまたまた眉間にしわを寄せる。

「おまえにカンケーねえし……」

そう言っつて、めんどくさそうに大きなため息をついた香川。

「あー、そうですか！ 私だつて、別に興味ないし！ じゃ、あ、ね！」

意味のない言い合いになって、私はぷいっと向きを変えて順子さんたちのいるカラオケ屋に戻ろうとしたんだけど……

ぱしっ。

香川にまた腕を掴まれて、引き止められる。

「なに？」

私はうんざりして聞いた。これ以上香川と話しても、聞きたいことは聞けないし、なんか変に胸はどきどきするし、できれば早くこの場から立ち去りたい。

それなのに、香川は私の腕を握った手にぎゅっと力を入れる。

「イタッ」

私は痛みに、顔をしかめる。

「もう、なんなの！」

そう言って、腕を振り払おうとしたのだけど出来なくて、香川の顔を睨みつける。

ばちゃんっ。

香川と目があって、その瞳があまりにも真剣な光を宿していてせせなかつた。

「……って、やるよ……」

「えっ？」

よく聞こえなくて、私は聞き返す。

「だから！ 俺が、花音の誕生日祝ってやるよ！」

その言葉にドキンとする。

いままでずっとおまえって呼ばれてきて名字の千葉とも呼ばれたことがなかったのに、いきなり名前で呼ばれて、顔がどんどん赤くなるのがわかつた。

そうしてその時、気づいてしまったの。

いつだって、私の胸がドキドキして痛むのは 香川が関係してるって。

香川と会った時、香川の話題になった時、香川のことを考えた時…… ああ、私、香川を好きなんだ。中学からずっと好きだったんだって実感したの。だけど、そう簡単に素直にはなれなくて。

「なっ、何言ってるの？ 意味分かんないし。ってか、あんたに祝ってほしいなんて言っていないじゃん！」

「はっ？ ほんとにかわいくないな、おまえ」

そう言った瞬間、香川がぐいっと私の腕を強く引く。その反動で私は倒れそうになって、香川の胸の中に抱きしめられていた。

「花音……」

ドキンッ。

名前を呼ばれて、体が震える。

「俺は……が……きだ、……っ……」

香川が耳元で何かを囁いたのだけど、よく聞こえなくて

「花音！ いたー！」

その時、悠ちゃんが私たちのところにやってきた。

「悠ちゃん！」

私は香川から離れて、がばつと悠ちゃんに抱きついた。もう意味不明なことばかりで頭の中が破裂寸前。泣きそうだった。

「よかった、プランタンの中にいて。鞆とコート忘れてたからどうしようかと思っただよ」

悠ちゃんはやさしく笑って私に言った後、香川を見る。

「困るんだよね、勝手に花音連れ出されちゃー。で、要件は済んだの？」

いつも中立の立場で怒ってるところも見たことのない悠ちゃんの口調が怖くて見上げると、鋭い眼差しを香川に向けていた。

「それは……」

香川は口ごもり、悠ちゃんの視線から逃れるように顔をそむける。そんな香川を見て、悠ちゃんがクスツと笑った。私は何がおかしいのかわからなくて首をかしげる。

悠ちゃんは、香川に近づいて耳元で何かを囁いて、またクスツと笑った。

「花音、行こう。みんな待ってるから」

「う、うん」

私は頷いて悠ちゃんについていこうとして、立ち止まった悠ちゃんにぶつかりそうになる。

「あつ、そうそう。これから花音の誕生日祝いするから、香川君も来たいなら来てもいいけど？ 誕生日のこと教えてくれた礼に来てもいいよ」

香川に魅惑的な視線を向けて言った。

「えっ？ お祝い？」

私はびっくりして、悠ちゃんに聞く。

「そうだよ！ なんて誕生日だって言ってくれなかったのさ。友達



なのに水臭いなあ」

悠ちゃんは私を見て言った。

「う、ごめん。言いづらくて……」

自分の誕生日が、クリスマスイブだなんて言いづらかった。子供の時は特に気にしてなかったんだけど、毎年、クリスマスと誕生日を一緒にお祝いされて、なんか損してる気分だった。プレゼントの包装だって、サンタやツリーの描かれたクリスマス仕様で、誕生日って実感も薄かった。

中学になってからは、イブが誕生日だって言うところその日はデートなんだ」って申し訳なさそうに友達に言われて、私の方がなんだかいけないことをしてる気がしてきた。

クリスマスなんてなくなればいいのに。そうしたら、私の誕生日は誕生日として祝ってもらえるのに、そんなことを考えた時もあった。

そして中学二年、その年は祝日だったクリスマスイブ。もちろん友達にデートだと言っていた。私は一人ショッピングにきていた。そのショッピングモールには、クリスマスシーズンには大きなクリスマスツリーが飾られ、その装飾は毎年違ってて、それを見るのが密かな楽しみだった。

一通りショッピングを満喫し、帰る前にクリスマスツリーをもう一度見ようと、ツリーのある噴水広場に足を向けた。すると、ツリーの前に香川と女の子がいるのに気がついて、私はあわててその場にしゃがんで隠れる。

しばらくして二人が仲良く手をつないで帰って行く後ろ姿を見て……自分の恋心に気づくと同時に失恋してしまった。

嫌いだっただ誕生日に失恋して、大嫌いになった誕生日とクリスマス。

だから、高校に入ってから誕生日を聞かれてもあいまいに誤魔化してきた。

「花音ちゃん、お誕生日おめでとう!!」

「メリークリスマス！カンパニー！」

そう言って、手に持ったペットボトルを上げる。ポンっポンっとペットボトル同士が当たる音が響く。

プラントンの外の噴水広場で、みんながそう言って私の誕生日を祝ってくれた。その中には香川もいる。

噴水広場の中央にある大きなクリスマスツリーは色とりどりのオーナメントが飾られ、その中でも木の最上部に飾られたオレンジ色の星がとても神秘的な輝きを放っていた。

小さい頃に、読んだ絵本を思い出す。迷いの森にある聖なるもみの木にオレンジ色の星を飾ると願い事が叶うという内容だった。

「花音、おめでとうー。ごめんね、誕生日だなんて知らないで」

順子さんがそう言って、小さな袋をはいっつとくれた。

「うっん、私こそ黙っててごめんね。これは？」

「さつき花音を探してる時に、かわいいなって思って買ったの。た  
いしたものじゃないけど、誕生日プレゼント！」

サンタやトナカイの絵とメリークリスマスと描かれた紙袋。それ  
を見て私は苦笑する。開けると、中身は耳あてだった。

「わっ、かわいい。ありがと順子さん」

私はぎゅっと順子さんに抱きつく。

「これは私から」

そう言っつて悠ちゃんが、雪の結晶の形のキャンドル立てをくれた。

「ありがと、悠ちゃん」

すっごくすっごく嬉しくて、私は涙が出てきた。こんなに幸せな  
誕生日は初めてかもしれない。

あんなに大嫌いだったクリスマスが好きになるなんて……それも  
これも、香川のおかげなんだよね。香川が私の誕生日だっつて、みん  
なの前で言っつてくれたから。そう思っつて、ちらつと香川の方を見る。  
香川は山口君となにやら話して笑っつていた。

胸がぎゅっと締めつけられて痛くて、でも暖かくて幸せな気持ち  
だった。

順子さんが他の友達と話しに行き悠ちゃんと二人きりになると、耳元で囁いた。

「なんでも相談にのるからね!」

「えっ?」

私はなんのことかわからなくて、悠ちゃんを見上げる。

「香川君のことが好きなんですよ?」

そう言われた瞬間、ぼぼっと顔が赤くなるのが自分でも分かって両手で顔を隠した。

わわっ、悠ちゃんには私の気持ち、ばれてる。そんなに周りの人から見て、私の気持ちってバレバレかしら。

「気持ち、伝えてみたら? 案外、上手く行くかもよ」

そう言う悠ちゃんに、私は冗談でしよって笑って。

「だって、奈良さんっていうかわいい彼女がいるんだよー、ないない、ありえない」

「そうかな? じゃあ、香川君はなんでここにいるの?」

そう言われて、首をかしげる。

「そーいえば。さっきまで奈良さんと一緒だったはずなのに」

私は記憶をたどる。

「他の女って言ってたな……、いや、でもおまえには関係ない、とも言われたし……」

一人でぶつぶつ言ってる私に、悠ちゃんがくすつと笑って。

「じゃあ、本人に聞いてみれば？　おい、香川君、彼女はとうしたんだ？」

前半は私に言って、後半は香川に向かって叫んだ。

香川は突然呼ばれてこつちを振り向き、はっ？　て顔して、私たちのいる場所まで歩いてきた。

「なに？」

そう言って、ちょっといらついた瞳で私を見る。

えっと、話しかけたのは私じゃないんだけど……そう思って、隣にいる悠ちゃんを見上げたのだけど、悠ちゃんは相変わらずくすくすと笑ってて、私の視線には気づいてくれない。

「花音、なに？」

香川にそう言われて、私はいよいよどうしていいか分からず悠ちゃんをつついた。

「えっ？　ああ」

私の視線に悠ちゃんがやっと気づいてくれたのだけど。

「香川君、彼女はとうしたの？　って花音が聞いているよ」

「えっ、私？ 悠ちゃん!？」

結局私に話しが振られて、どうしたらいいのか焦る。香川を見ると、さつきよりも怖い顔をして私を睨んできた。

うう、怖い……

「えっと、奈良さんはどうしたの？ 先に帰ったの？」

仕方なく、恐る恐る自分で聞く。その言葉に、ギロツと睨まれ。

「奈良とはわかれた、ってさつき言っただろ」

「そっか……」

別行動して帰ったのか奈良さん？ 私はそういう風に解釈して一人頷いた。

「でっ？」

「えっ？」

香川が真剣な瞳で聞いてきたけど、なんのこともわからなくてぼかんとする。隣を見ると、いつの間にか悠ちゃんはいなくなっている。

「さつき俺が言ったこと……返事だよ」

「えっと、何のこと？」

香川に言われて、私は首をかしげる。

その瞬間、香川のこめかみがぴくつとして、目がキラッと光ったように感じた。怖い！

「っ！」

香川が何か言いかけた時、広場にパッと明かりがついてイルミネーションがキラキラと光りだす。

いつの間にか空が暗くなり、イルミネーションのあたたかな光がクリスマスツリーを照らしていた。

「わぁ……きれい……」

思わず、そうこぼしていた。こんなに綺麗なクリスマスツリーをこの三年間、ちゃんと見ようとしなかったなんて、ちょっともったいなかったなあ。

その景色があまりに幻想的で、このクリスマスツリーが迷いの森のもみの木みたいに思えた。

私が口をあけてぼーっとイルミネーションにみとれてると、手に熱を感じる。

見ると、香川がクリスマスツリーに視線を向けたまま、私の手を握ってた。

ドキンっ。

鼓動が早くなって、胸がほかほかする。

「好き……」

私もクリスマスツリーに視線を向けたまま、気づいたらつぶやいていた。

香川がこっちを振り返ったのが気配で分かる。私は、思い切って香川の方を向くと、さっきまで苛立ってた香川の瞳が今度は困惑を浮かべていた。

くすつ。

私はそんな香川を笑ってから、掴まれた手をぱっと離して悠ちやん達のところへ走り出した。

クリスマスが大嫌いにさせた、香川。

クリスマスを大好きにさせた、香川。

嫌いだった香川を好きになった私。

嫌いって、実は、嫌いよりも好きって気持ちに近いのかも。

香川が誰を好きでもいいかな。彼女がいてもいいかな。私が香川を好きって気持ちに変わりはないんだし。

いつか正面から、好きって言えたらいいな

迷いの森の聖なるもみの木にそう祈った。



## 第7話 迷いの森の聖なるもみの木（後書き）

これにて、完結です！

ここまで読んでくださってありがとうございます。

1ポイントでもいいので評価頂けると今後の励みになります。

番外編というか、香川視点のお話「ハシリボシ」をUPしました。  
そちらもよかったら読んでみて下さい。

誤字などありましたら、お知らせください。> m ( ) m <

若干、文章の訂正をしました。内容はほとんど変わってないと思います。

( ) 2 0 1 1 . 2 . 2 5 ( )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4156p/>

---

クリスマスなんて大嫌い！

2011年8月7日20時24分発行